



Title	特別研修報告: 留学生の日本理解のための映像教材
Author(s)	西, 昌樹
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 59, 123-135
Issue Date	2010-11-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44401
Type	bulletin (article)
File Information	MSC59_005.pdf



[Instructions for use](#)

留学生の日本理解のための映像教材

西 昌 樹

筆者は北海道大学において短期留学生を主な対象とする国際交流科目（HUSTEP）を長年展開してきた。この授業 Japanese society and culture as viewed through Japanese cinema（「映画に見る日本の社会と文化」）において第2次大戦後の日本映画を題材にして日本の社会と文化を講義している。15週の授業では各週で日本の自然、家族、戦争、植民地、戦後、夫婦、若者、在日外国人、ヤクザ、時代劇、文芸映画、アニメなどのテーマを採り上げて、第2次大戦後の日本の歴史・社会・文化を紹介してきた。今回の特別研修（6ヶ月）を機にそのプログラムの更なる充実と完成を目指し、現在までの授業経験を基にして授業計画を再検討し、留学生または外国人の日本理解を進める教育モデルを更に構築するためにこの研修期間を充てることとした。

現在来日する留学生は、日本の大学生に比べ、日本映画に興味を持ち、来日前に映画を観て来ている。勿論彼らが興味を持つ映像の最大公約数は、スタジオ・ジブリ（宮崎駿）を始めとする世界的に有名な日本のアニメや、ゲーム、マンガであり、その他は近年公開され評判になった何本かの映画である。しかし『東京物語』や『羅生門』のような昔の名作を観ている留学生も少なからず存在する。一方日本の大学生で筆者の映像関係の授業を履修する者では昔の日本映画を見ている者は殆どいない。そこで筆者は留学生に対して彼らが余り知らない映画を見せ、日本や日本映画への理解を深めることを試みてきた。

同様の試みを、名古屋で行なってこられた愛知淑徳大学教授の窪田守弘氏が協力者と共に『映画で日本文化を学ぶ人のために』（世界思想社、2007）という書物を上梓された。筆者との違いは現代の日本を理解するために14の分野（テーマ）28作品（多くは近年の作品）を採り上げ、関連映画にも言及されている点である。筆者の選択と重なる作品もあるが、筆者は戦後日本映画を広く採り上げ、戦後社会の歴史・文化を総体として理解することを目標にしている。窪田氏の優れた実践に対して、筆者の研修を利用したモデル構築再検討の試みが、何か参考として付け加えるものがあれば幸いである。

以下で今までの授業内容の概略を述べてみたい。（作品名の後のかっこ内は監督名である）
第1週：ガイダンスとイントロダクション、短いビデオ上映（例 宮崎駿の短編『On your

mark.』)

- 第2週：日本の自然 『絵の中のぼくの村』（東陽一）『萌の朱雀』（河瀬直美）
- 第3週：日本の家族1 『東京物語』（小津安二郎）
- 第4週：日本の家族2 『喜びも悲しみも幾年月』（木下恵介）『家族ゲーム』（森田芳光）
- 第5週：戦争 『二十四の瞳』（木下恵介）『独立愚連隊西へ』『肉弾』（岡本喜八）『ゆきゆきて神軍』（原一男）『黒い雨』（今村昌平）
- 第6週：戦後 『麻雀放浪記』（和田誠）『カルメン故郷に帰る』（木下恵介）『浮雲』（成瀬巳喜男）
- 第7週：夫婦 『幻の光』（是枝裕和）
- 第8週：都会への憧れ 『祭の準備』（黒木和雄）『サード』（東陽一）『東京兄弟』（市川準）
- 第9週：在日外国人 『月はどっちに出ている』（崔洋一）『KAMIKAZE TAXI』（原田真人）『GO』（行定勲）
- 第10週：文芸映画 『羅生門』（黒澤明）『山椒大夫』（溝口健二）
- 第11週：ヤクザ・ギャング映画—鈴木清順監督の奇妙な世界
『刺青一代』『殺しの烙印』『野獣の青春』『けんかえれじい』『東京流れ者』
- 第12週：時代劇 『宮本武蔵 一乗寺の決闘』（稲垣浩、内田吐夢）『用心棒』『椿三十郎』（黒澤明）
- 第13週：SF映画 『ゴジラ』（本田猪四郎）
- 第14週：アニメ 『ルパン三世カリオストロの城』（宮崎駿）『Ghost in the Shell 攻殻機動隊』（押井守）
- 第15週：まとめ

以上である。

詳しい説明をつけ加えれば留学生の観たことのない映画、しかも英語字幕なしが殆どであるが、それに筆者の拙い英語の説明、同時訳、コメントを付しての授業で、彼らが興味を示し理解したのは『絵の中のぼくの村』『萌の朱雀』『東京物語』『家族ゲーム』『ゆきゆきて神軍』『カルメン故郷に帰る』『幻の光』『サード』『祭の準備』『月はどっちに出ている』『野獣の青春』『東京流れ者』『宮本武蔵』（内田吐夢）であったことは非常に興味深い。彼らが理解できないのは、たとえば『浮雲』はその風俗的な面（パンパンなど）ではなく、日本の人間関係などに細かい理解が不足しているが主因であろう。なお現在では多くの日本映画の英語字幕付きDVDがアメリカで発売されている。

以上の授業実践を再検討したが、結果として付け加えるものはそれほど多くは無かった。長年の教育実践の結果、現在までの改良がある程度成功していると評価できよう。しかしまだまだ改良の余地があると考え。停年を控え、この特別研修の機会に、留学生への日本理解・日

本研修のための映像授業のプログラムの更なる完成を目指したのである。

第一に問題になるのは、映像資料の選択である。現在留学生が既知の、あるいは興味を持つ映画は圧倒的に近年の日本映画に限られていると言って良い。例外は『東京物語』『羅生門』『七人の侍』など映画史上有名な作品ぐらいである。このギャップを考慮しつつも、あえて英語字幕のない映像ソフトを使用して、彼らに映画の一部を見せ説明することは、成功した時の充実感はさておき、非常に手間のかかる作業になる。映画を見せておけばよいなどと言う簡単な問題ではない。以下で今までの授業プログラムの題材を再検討して新たな資料選択による、プログラムの現時点での完成を試みたい。

1. テーマの選択

現在の15週のプログラムでは第1週のガイダンスとイントロダクションは省けない。残りの13～14週の授業の各週のテーマとその順序が検討の対象になる。テーマは現在行なっている授業のテーマで良いと考えられる。その順番であるが、まず日本の美しい自然の中の生活を紹介する。大都市、観光地などは彼らの知っている可能性があるが、田舎の生活、一つは昔、戦後すぐの、一つは昭和40年代の田舎が舞台である。次に日本の家族関係を理解させる。家族の絆の崩壊、家庭の変容を歴史的に、時代を経て観ていく。更に、日本のカップル、若者風俗、在日外国人、第2次大戦、戦後の風景等を観て、映画のジャンルとして、文芸映画、時代劇、ギャング・ヤクザ映画、怪獣映画を紹介する、以上のような構成になっている。

以下でそれぞれのテーマにふさわしい作品を改めて検討したい。特記しない限り日本で市販のDVD、ビデオソフトである。

1) 日本の自然

現代の大都市ではなく田舎に残っている美しい自然を背景にした作品

『絵の中のぼくの村』(東陽一 1996) 英語字幕付ビデオ (北海道大学附属北図書館に所蔵)

戦後すぐの高知の田舎における双子の兄弟 (後に二人とも有名な絵本作家になる) の日々。まだ日本が貧しかった時代の田舎の生活が描かれる。

『萌の朱雀』(河瀬直美 1997)

奈良の南 (朱雀の方角) にある山村における、少女の成長。父の死、家族の離散が描かれ、美しい自然の中の山村の農林業が振るわず、人口が減少していく状況が見て取れる。

以上の選択に付け加えるものがないと考えられる。前者では靴、下駄、裸足の子の混在に村内の貧しさの差が見られ、農地解放の影響などをコメントすることができる。しかし留学生はまず双子のいたざらや天衣無縫さに注目する。後者においては自然の美しさと少女の成長が注目される。またトラックによる食料品の行商など都会にない情景が興味を呼ぶ。鉄道建設の中止により放棄されたトンネルと、バスしかない寒村の状況をコメントする。ただ美しい自然を

紹介したり、厳しい自然の中で生き抜く人々を描く作品より、過疎地域の自然の中での日常生活を、地域の問題を紹介しつつ描いた作品を取り上げる。

2) 日本の家族

『東京物語』（小津安二郎 1953）英語字幕付ビデオ（北海道大学附属北図書館に所蔵）

映画史的にも有名な作品であるが、この戦後すぐの作品において、今日に通じる家族の崩壊（核家族化）の予兆が見て取れる。東京に子供たちを訪ねる老夫婦に対して、仕事が忙しく、生活に追われる彼らはもてなす時間が十分でない。帰宅後母の急死で老いた父は家長の位置から退いていることが伺える。戦前の家長制度や家族制度（特に女性の地位）についてコメントが可能であり、母の葬式後の会食で卓子の中心に長男が座っていること（家長の地位相続）を指摘することも可能である。戦前から続いた家制度の崩壊を示唆している作品と言えよう。

『喜びも悲しみも幾年月』（木下恵介 1957）

上海事変の頃に結婚し、戦中・戦後を生きた灯台守の夫婦の年代記。全国の灯台を旅し、平和になって息子の死に会い、老年を迎える。石狩灯台が出てきてコメントすると興味を持つ。若者の出征風景と戦死して骨箱で戻ってくる場面や戦争末期の竹槍訓練の場面で日本の庶民にとっての戦争についてコメントする。ただし戦争時の苦難の描写はあっても戦争（侵略）への考察は不足している。

『妹』（藤田敏八 1974）

妹が婚家を家出し、失踪する。兄は彼女を探す。親は出てこない。兄妹だけで物語は進む。若い妹が何を考えているのか分からない。現在に繋がる親の不在、若い世代への理解できないギャップなどが既に描かれている。以後親が不在の兄弟だけの家庭が映画のみでなく小説、マンガなどで描かれることになる。これも家庭の崩壊の一面であろう。

『家族ゲーム』（森田芳光 1983）

巨大マンションでの一家の生活。次男の高校入試のため雇った家庭教師が起こすトラブルの喜劇。ここではすでに家族は崩壊し、親や子の役割を演じるだけであり、まるでRPG（ロール・プレイング・ゲーム）のようである。日本の受験状況、教育環境、夫婦の役割（妻に家庭を任せる）などいろいろな側面についてコメント可能である。

『誰も知らない』（是枝裕和 2004）英語字幕付DVD（市販）

男の所に行った母に遺棄され、借りたマンションに隠れ住む兄弟の物語（実話を基にしている）。兄弟の一人は死んでしまう。それを隠す兄。世界的に有名な映画である。留学生の反応には「信じられない」というものがあつたが、子供の虐待、遺棄がフィクションではない現代社会を描き、現在の貧困を描いたものとして紹介する価値があると考えられる。

『ラブ&ポップ』（庵野秀明 1997）

村上龍原作の、アニメ『エヴァンゲリオン』監督の庵野の実写映画。初めに家族はそれぞれ自分の好きなことしかしていない姿が描かれ、成員が孤立し暮らす姿が描かれる。家族の紐帯

は希薄化し、互いに強い関心を持たない。『家族ゲーム』にあった反撥もない。ヒロインの女子高校生はトパーズの指輪が買いたくて援助交際を試みるが地獄めぐりのような経験をする。以上で日本の家族の紐帯の変化をコメントする。

3) 大都市への憧れ

地方からの東京への憧れである。もっと良い暮らし、仕事があると考えて地方在住者は東京に行きたいと思う。北海道においてはそれが札幌であることを指摘するのも可能である。

『祭りの準備』(黒木和雄 1975)

高知県の小都市に住む信用金庫に勤める青年が、シナリオライターになるために東京を目指して家を出るまでの物語。50年代の田舎の濃密な人間関係が喜劇的に描かれる。この時代にはまだ東京に出ることは、成功は保証されないとはいえ希望であった。

『サード』(東陽一 1977)

東京から少し離れた地方都市の高校生(男女2人ずつ)の4人組は地元を出て行く資金を稼ぐために週末に東京に出ては売春をする(男たちは客引きをする)。客がヤクザでトラブルの末に殺してしまい、少年たちは少年院に送られる。タイトルは主人公が野球部のサードだったからである。援助交際などという言葉が現れる以前の70年代の少女売春(それより過去の時代もずっと存在した)を描き、罪悪感よりもまるでクラブ活動をするような行動が描かれる。

参考 果たして彼らが目指した東京の実像はいかなるものであったのであろうか。

『バウンス・ko GALS』(原田真人 1997)

東京の女子高校生の風俗が描かれる。援助交際、ストリートダンス、チーマー、ブルセラショップなどが描かれ、都会の若者の風俗が見られる。

『東京兄弟』(市川準 1994)

対照的に東京の静かな古い住宅街に住む兄妹の生活を描く。木造の日本家屋の生活を紹介し、マンションとの違いを指摘できる。

『東京日和』(竹中直人 1997)

写真家荒木経惟・陽子夫妻をモデルにして、これも東京の古い住宅街や旅行先の九州柳川の風景が見られる。上京者は華やかで現代的な東京に憧れるが、古くからの東京人は古い住宅街にノスタルジーを感じると思われる(東京オリンピック以前の町並みなど)。

4) 夫婦一生と死

『幻の光』(是枝裕和 1995) 英語字幕付 DVD (市販)

阪神間の下町で夫を原因不明の自殺で失い、息子を連れ再婚し能登に行った女性の物語。親しい者の死(祖母、夫)に囚われたヒロインが死から解放されるまでを描いている。都市でのつつましい生活、能登の自然の中の生活の対比、漁村の生活、輪島の朝市など説明する題材が多い。夫の自殺の原因が分からないことが留学生の疑問を呼んでいる。この映画はシーンを適当にカットして最初から最後まで見せることにしている。

5) 若者—学校・学生

『リング リング リング』(山下敦弘 2005)

地方の高校に留学した韓国の女子生徒が。クラスメートの女子と一緒にバンドを組んで文化祭でブルーハーツの曲を演奏する。彼女が韓国の文化を展示した教室を訪れる者は殆どいない。

『青春デンドケデケデケ』(大林宣彦 1992)

四国の田舎の高校でベンチャーズに憧れる男子生徒がバンドを組む。田舎における都会と新しい音楽(エレキギター)への憧れはその時代の青少年に共通したものであった。

『台風クラブ』(相米慎二 1985)

地方都市の中学生たちを主人公にして、台風の襲来時に学校に残された彼らの鬱屈の爆発を描く映画史上有名な作品。

『下妻物語』(中島哲也 2004)

学校は出てこないが、ヤンキーとロリータファッションに殉じて生きる二人の少女の友情物語で、田舎における普通から外れた少女たちを描いている。趣味を生き方に選んだ少女たちの徹底性と田舎のスーパーの消費生活の支配への言及など優れた社会批評になっており、留学生への知名度は高い。これが現在における「おたく」の生き方に通底する。

6) 在日外国人

『月はどっちに出ている』(崔洋一 1993)

在日朝鮮人の梁石日の原作(一種の自伝的作品)を在日の崔洋一が映画化。政治的ではない、ただ女好きの主人公の日常を描く。母親の経営するパブのフィリピン女性との関係を通じて在日の外国人への差別問題があぶり出されていく。

『不夜城』(李志毅 1998)

新宿に住む日本人との混血の中国マフィアの青年。歌舞伎町を舞台とし、警官も職務質問を躊躇うアンダーグラウンド社会を描く。主人公は中国人からも日本人からも結局は忌避される存在である。

『KAMIKAZE TAXI』(原田真人 1994)

在日の日本人移民の子孫の日本への出稼ぎの実態を通じて、微妙な差別の実態が浮かび上がってくる。

『GO』(行定勲 2001)

在日の高校生の膚に感じる差別が描かれる。それに抗うために暴力的にならざるを得ない主人公たちの姿。

7) 戦争・植民地

『二十四の瞳』(木下恵介 1954)

戦争は悲惨でありその犠牲者は虚しい。この映画で特に注目したいのは生徒に自由作文を書かせることさえ禁じる戦争中の思想統制の教育現場である。

『独立愚連隊西へ』『肉弾』（岡本喜八 1960、1968）

戦争を背景とした日本映画では戦争の悲惨さが主に語られる。戦闘場面のリアルさは一部の例外を除き避けられる。残るのは喜劇的な戦闘状態、戦争の馬鹿馬鹿しさである。映画においてまさに戦争の悲惨さは笑いと共にしか語れない例である。

『ゆきゆきて神軍』（原一男 1987）

たった一人で戦争責任を追求し続ける一個人を追うドキュメンタリー。彼の特異でエキセントリックな行動は、留学生（特にアジアの）の驚きを呼ぶ。何故なら多くの日本人は戦争を忘れたがっているからである。

『黒い雨』（今村昌平 1989）

原爆投下に対しては日本の起こした戦争に対する当然の結果であるという反応が、留学生から普通にあるが、この映画を通して原爆がいかなる大量殺戮兵器であり、その被害がいかに恐ろしいものであるか、非戦闘員の殺戮という問題（スペイン、ゲルニカから中国、イギリス、ドイツ空爆を経て日本本土空襲、広島、長崎まで）を考えてもらう契機になる。

『赤いコーリャン』（張藝謀 1987）

日本映画では戦争責任を描いた映画は少ないので、中国、香港などのアジアの映画を参考にする。特に日本軍が捕まえた敵の内通者（と思われる捕虜）の処刑シーン（生きたまま皮を剥いで殺させる）や最後の農民たちが日本軍を待ち伏せて襲撃するシーンを見せる。

『風の輝く朝に』（梁普智 1985）

二人の青年と娘の青春の背景は日本軍が占領する香港である。民心慰撫のため、米を与えて日本の歌を歌わせる。占領とは英語の街路表示が日本語に替えられることにも表れる。

『鬼が来た』（姜文 2000）

日本軍が占領する寒村で抗日ゲリラに日本軍の捕虜を託された農民のとまどい。互いの意思が通じると思えた時、終戦になり平和が来たはずが、日本軍指導者の突然の怒りにより、村民の殺戮が始まる。

以上の中国映画の戦争描写は我々にとって見るに堪えぬと思われるようなものもあるが、戦争の実相を示すには省略できないものである。留学生（特にアジアの）との共通の認識を得るため戦争映画の選択には十分な検討が必要である。

8) 戦後

『麻雀放浪記』（和田誠 1984）

注目すべきはミニチュアセットの上野の焼け跡の風景と上野公園の浮浪児である。参考にするべきはロッセリーニ監督の『ドイツ零年』において実際にロケされたベルリンの廃墟である（石造りの建物はレンガの山の廃墟になる。その風景はマックス・エルンストの絵画『雨後のヨーロッパ』を思わせる。日本は木造建造物が多いので更地になる）。

『青い山脈』（今井正 1949、西河克己 1963）

戦後日本にもたらされた民主主義に対する反応はどのようなものであったのであろうか。古いモラルがまだ強固に残る地方都市を舞台に、若者たちの自由への希求を描く。クラス討論で恋愛を採り上げるなど現在から見ると微笑ましいが、男子高校生と一緒に歩いただけで非難された女子高校生に女性教師が「そんなことに負けてはいけないわ」と言う台詞こそ、橋本治が指摘したごとく素晴らしいものであり、真の民主主義の美しい記憶であった。後の吉永小百合主演のリメイク映画では戦後のその記憶が抜け落ちている。

『カルメン故郷に帰る』（木下恵介 1951）

ここでの民主主義のシンボルは里帰りしたストリッパーである。彼女の奔放な行動は純朴な村人の眉を顰めさせるが、それが極端であっても民主主義の自由に繋がる。モダニストの監督の傑作である。さんざん村を騒がせて彼女は東京に戻る。

『浮雲』（成瀬巳喜男 1955）

植民地（ベトナム）で優雅な生活を送り、不倫の関係を結んでいた男女が、戦後の日本に引き揚げてくる。闇市の時代、女は米軍兵士のオンリー（決まった相手を持つ娼婦）になり、男はふらふらと暮らしている。駄目な男についていく女は東京を離れ、屋久島で死ぬ。

参考 『新しい神様』（土屋豊 1999）

右翼のパンクロックバンドのヴォーカリストの女性を追ったドキュメンタリー。そのヒロインが雨宮処凛である。イデオロギーだけに原因を求められない若者の姿に注目する。

9) 文芸映画

『羅生門』（黒澤明 1950） 英語字幕付ビデオ（北海道大学附属北函書館に所蔵）

クラスで映画全体を見せることが可能である(83分)。名作と言うことでなく、原作の芥川の『藪の中』の秀れた映画化と言うだけでなく、事件の真実が何か、当事者や目撃者の証言からは理解できないというテーマを指摘する。

10) ヤクザ・ギャング映画—鈴木清順監督の奇妙な世界

あえて『仁義なき戦い』や高倉健のヤクザ映画を採らず、香港映画に影響を与えた（例：『男たちの挽歌』）日活ギャング映画を採り上げる。石原裕次郎ではなく、B級映画の鈴木清順の（『ツィゴイネルワイゼン』以後ではなく）日活映画である。

『刺青一代』（1965）

ヤクザの兄と画学生の弟が追手を逃れ満州に渡ろうとする。特高、サーベルを帯びた警官等の時代背景、スタイリッシュな殺陣、斬新なカメラアングル、変転するカラーなど娯楽映画の面白さを紹介できる。

『殺しの烙印』（1967）

予算不足に苦しみながら撮った殺し屋の映画であるが、その省略された語り口がユーモアを呼ぶ。映画は少ない予算でも撮れる見本である。

『野獣の青春』（1963）

はぐれ刑事の潜入捜査の復讐譚であるが、ボスの別荘の外が急に嵐になり、サディストのボスは草原で情婦に鞭を振るうシーンや縦半分が赤白に塗られた電話機など作り物でも面白ければ良いという好い加減さ溢れるエンターテインメントである。

『けんかえれじい』(1966)

旧制中学でけんかにあけくれる主人公の青春。憧れの人のピアノに向かいズボンを下ろしてある器官で鍵盤を弾くシーンで留学生たちは哄笑する。しかし彼はクリスチャンである。そして時代は二・二六事件に向かい、その後主人公は上京する。

『東京流れ者』(1966) 英語字幕付ビデオ (北海道大学附属北図書館に所蔵)

日活のムードアクションの最後を飾る作品。十分な予算を与えられなかった監督はそれでも映画を撮る。最後の悪玉のボスとの対決シーンでは白く塗ったスタジオがピアノだけを置いたクラブになる。天井は無く柱だけが建っている。このシュールな背景で撃ち合いが行われる。まさに映像のマジックである。各地をさすらう流れ者という日本的な存在も説明する。

11) 時代劇

『宮本武蔵 一乗寺の決闘』(稲垣浩 1955、英語字幕付ビデオ(北海道大学附属北図書館に所蔵)、内田吐夢 1964)

前者の三船敏郎の武蔵は勇猛な剣豪であるが、見せたいのは内田のヴァージョンの武蔵である。時代劇の一番有名なヒーローであるが、一乗寺下り松において、彼は奇襲して新しい当主となる子供を一番に殺し、多数の敵と斬り合いながら遁走する。ヒロイックな剣豪像を否定し、所詮果たし合いが殺し合いであることをリアルに描いている。

『用心棒』『椿三十郎』(黒澤明 1961、1962) 英語字幕付ビデオ (北海道大学附属北図書館に所蔵)

前者におけるヒントになったダシール・ハメットのハードボイルド作品の影響、最後の決闘における西部劇のスタイルなど、時代劇にも見られるアメリカの影響を指摘する(更にこの作品が『荒野の用心棒』を生む)。後者の皮肉なストーリーは英雄的な侍が最早平和な社会では持て余される厄介者であることを示している。

以上ヒロイックファンタジーとしての時代劇の変容をコメントしたい(西部劇でも最後の西部劇と言われるイーストウッドの『許されざる者』が想起される)。

12) SF 映画

『ゴジラ』(本田猪四郎 1954)

同年のビキニ環礁の水爆実験と第五福竜丸の被爆に触発された、核の恐怖映画でもある。核兵器による滅亡を予兆する恐怖が底流にある。またゴジラに逃げ惑う人の群れは第2次大戦の東京大空襲の記憶に重なる。広島・長崎と空襲の恐怖が底にあることを指摘する。

13) アニメ

『白蛇伝』(大川博 1958)

日本初の長編アニメ映画。社長が総監督になり、日本初のアニメ長編を作ったという資料的価値があり、見せるに値する。声優が二人（声色で多くのキャラクターを演じる、森繁久弥と宮城まり子のみ）という点も特筆に値する。

『ルパン三世カリオストロの城』（宮崎駿 1979）英語音声版レーザーディスクあり

留学生が殆ど見ているというジブリアニメの宮崎作品の中で、彼の初長編アニメを採り上げる。アニメの楽しさを実感できる作品であるが、技術的水準は高い。参考としては『ルパン三世』TV シリーズで彼が演出した『死の翼アルバトロス』があげられよう。『風の谷のナウシカ』は殆ど全員が観ているので割愛する。

『Ghost in the Shell 攻殻機動隊』（押井守 1995）英語音声版ビデオ（筆者所有）

押井守作品で一番海外で知られた作品。義経等の考察を省き、その映像技術（『イノセンス』がその極致ではあるが）を見せる。

2. 教育プログラム

以上の再検討を経て留学生に映画を使って日本事情を教えるプログラムを作成する。

- 第1週 イントロダクション 使用する教材は短編で馴染みのある制作者によるものが望ましい（宮崎駿の短編アニメ『On your mark』）
- 第2週 日本の自然 『絵の中のぼくの村』『萌の朱雀』
- 第3週 日本の家族1 『東京物語』
- 第4週 日本の家族2 『喜びも悲しみも幾年月』『妹』『家族ゲーム』『誰も知らない』
- 第5週 都会への憧れ 『祭りの準備』『サード』
- 第6週 夫婦 『幻の光』
- 第7週 若者たち 『リングダ リンダ リンダ』『台風クラブ』『青春デンデケデケデケ』『下妻物語』
- 第8週 在日外国人 『月はどっちに出ている』『不夜城』『KAMIKAZE TAXI』『GO』
- 第9週 戦争1 『二十四の瞳』『独立愚連隊西へ』『肉弾』『赤いコーリャン』
- 第10週 戦争2 『ゆきゆきて神軍』『黒い雨』『風の輝く朝に』『鬼が来た』
- 第11週 戦後 『麻雀放浪記』『青い山脈』『カルメン故郷に帰る』『浮雲』
- 第12週 文芸映画 『羅生門』
- 第13週 時代劇 『宮本武蔵 一乗寺の決闘』（内田吐夢）『用心棒』『椿三十郎』
- 第14週 ギャング映画 『刺青一代』『殺しの烙印』『野獣の青春』『けんかえれじい』『東京流れ者』
- 第15週 SF 映画 『ゴジラ』
- 補講 アニメ映画 『白蛇伝』『ルパン三世カリオストロの城』『Ghost in the Shell 攻殻機動隊』

第1週を省略して15回で13の分野を提示するのも良いと思われる。授業実践で留学生からの希望として、もっと映画を長く見せてほしい（できれば1本全部）という要望があったが、この授業は日本映画を見せて論じる授業ではなく、採り上げた映画の各シーンに現れる日本の社会・文化を理解するための授業であり、ストーリーは最小限の説明に留まることを回答した。第12週以後は映画のジャンルで分けているが、ここでもあくまで他の国とは違う文化を紹介するものである。この授業で日本映画に興味を持ち、北図書館に所蔵されている英語字幕付きの日本映画のビデオなどを利用して、日本映画を観てほしいと考える。さらに日本語ができる留学生は北図書館の日本映画の映像資料（ビデオ、レーザーディスク、DVD）をおおいに利用して頂きたい。

3. 最後に

ここで述べたプログラムは第2次大戦後から現代に至る作品を基にしたものであるが、更なる改良を期するものである。

(2010年6月12日受理)

《SUMMARY》

Japanese Cinema Program for Studies of Japanese Culture and Society

Masaki NISHI

To provide an insight into Japanese culture and society through Japanese films, I give a class “Japanese Culture and Society as Viewed Through Japanese Cinema” for foreign students. In this class, students view a variety of Japanese films and then examine various aspects and images of Japanese culture and society as presented in these movies. On the occasion of the sabbatical, the last version of this program was completed, using movies based on the weekly themes listed below.

Course Description

- Week 1 General Introduction (On your mark)
- Week 2 Nature (Village of Dreams, Suzaku)
- Week 3 The Japanese Family 1 (Tokyo Story)
- Week 4 The Japanese Family 2 (Times of Joy and Sorrow, The Little Sister, The Family Game, Nobody Knows)
- Week 5 Bright Lights, Big City (Prepare for the Fair, The Boy called Third Base)
- Week 6 Couples (Maboroshi)
- Week 7 Young People (Linda Linda Linda, Seishun Den Deke Deke Deke (The Rocking Horseman), Kamikaze Girls)
- Week 8 Foreigners in Japan (All under the Moon, Sleepless Town, Kamikaze Taxi, Go)
- Week 9 War and Colonization 1 (Twenty-four Eyes, Westward Desperado, A Human Bullet, Red Sorghum)
- Week 10 War and Colonization 2 (Forward, Army of God, Black Rain, Hong Kong 1941, Devils on the Doorstep)
- Week 11 Japan after World War II (A Record of Wandering of a Mah-jongg Player, Green Mountains, Carmen Comes home, Floating Clouds)
- Week 12 Literature and Folklore (Rashomon)

Week 13 Gangster and Yakuza Movies (World of Seijun Suzuki: Tattooed Life, Branded to Kill, Youth of the Beast, Fighting Elegy, Tokyo Drifter)

Week 14 Samurai Movies (Duel at Ichijoji Temple, Yojimbo, Sanjuro)

Week 15 Fantasy and Science Fiction (Godzilla)

Supplementary week Animated Films (Legend of White Snake (White Lovers), Lupin the 3rd: The Castle of Cagliostro, Ghost in the Shell)